

# The Gallery Voice No. 8

発行/画廊沖縄〒900 那覇市泉崎2-2-3 ☎(0988)34-6760/ART COMMUNICATION PAPER/ 1990.9.1

## 「批評」ということ

洲鎌 朝夫

「建築」をしているのに、展評をかいたり、あるいは社会時評などするのは不可思議だといぶかる人がいる。そんな人にははっきりいって、二の句がつけないのであるが、「だから何！」と心でつぶやいてみせる。「建築」はたまた「洲鎌」という人間に対する認識のほどを指しているのであろうが、そのような程度の話では片腹いたいほどのことで、とり合う気になれないのもほんとのことである。

「教育」にたずさわっていて、絵を描けば「画家」となることの1次函数的な変位をさておいての話だからだ。A・ガウディやF・L・ライトなどのスケッチをみたことがあるか。建築に関心がないとて、ミケランジェロやダヴィンチのことは知っていよう。

たとえば「芸術」全般にかかわるほどに「建築」などというの見過ごせぬサブジェクトにちがいないのだが、それがそうではない。

「工学」エンジニアリングの枠内にとじこめておいて自己の視野のせまさというか見のつたなさをかえりみようとしな。

ガウディやライトを語るまでもなく、今井兼次や磯崎新などのスケッチやグラフィックはそこいらのアーティストの及ぶところではない。

「建築」とてすぐに定規から入るわけではないのであって、それなりのエスキースにはデッサン力なり、思考の推敲を重

ねながら難渋し、あるいは発作的なひらめきのスクロール(かきむしる)からうまれてくるものなのだ。

「絵かき」に文章が苦手だのしゃべりはどうもというのは、アーティストとしての言語中枢の軟化を意味すると思っ

ている。池田満寿夫あたりは、言語でものを考え、美術で表現しえないあたりを小説や映画なりのメソッドで自己表現を試みて



いる。もとより表現するというクリエイティブなジャンルで、キャンパスと絵具の中にとじこもっているほど退屈なこともあるまい。いまいちど“眼”を開くまえに“頭”をひらいてみてはどうか。

今の沖縄画壇の状況をかんがみるに、楽しみな兆しもみえてきたものの、若干馬鹿を重ねたせいか、稚拙な作品にはすでに我慢できないいらだちを感じる。

ボードレールが個性とか独創とか孤独を弁じながら、当時の「ローマン派芸術」にいかにかぎり切っていたかを何かの本でよんだ。

独創をいいながら、それに達する道を知らず、模倣に安住する低次元の個性発揮競争の時代はすでに終わったのである。

陰ケンで不透明ないわゆる「絵画」業界の理想的意識へのジェラシーとコンプレックスは、時として茶番ですらある。

言語を駆使した論争や間違なる感性の披露なしの、なかよし隣組の小っぱけな呪咀など去勢された男性像のさいたるものかも知れない。

「批評」とは「非ヲ摘ミテ評スルコト」と大言海にあるが、小林秀雄流にいえば「ある対象を批判するとは、それを正しく評価することであり、正しく評価するとは、その在るがままの性質を積極的に肯定すること」に外ならず、「分析と限定は必至の手段」であり、媚びたり苦言を呈する事とはおのずら違うのである。

「評価」にあたいするかどうかは、人文科学だけにやらず自然科学や時には宗教哲学など総動員して、事に当らねばならず「主張の断念」という果敢な精神に裏付けされねばならない。

「独断」を慎みながら「偏見」を上手にまともあげねば始末悪いわけで、読者がみて「独断と偏見」にみちみちているといったところで、関与しない風でいて、ひとり反省したりする、ピュアニリズムの暖用ももち合わせていなければならぬ。

所詮、「祝辞」や「ヨイショ」の中に芸術的孕みなどないこと勿論である。

(すがま あさお・匠設計代表)

\* 額縁の専門店 \*

合資会社 前田額装商会

〒900 那覇市松尾2-7-29 ☎(0988)67-4811 FAX(0988)61-0367



沖縄で生まれた郷土の信販会社

沖縄信販

〒900 那覇市松山2-3-10 ☎(0988)61-1123代

アートライフは、OCクレジットで。

# 押し込められた饒舌

VOICE INTERVIEW ④  
■ 画家・豊平ヨシオ

廢材に沁みこんだ存在と時間の挑発性。豊平ヨシオの、その押し込められた饒舌とも言うべき世界は、まさしく日常的であるがゆえに、より刺激的なエネルギーをハラんでいる。氏の今日のこと、沖縄の絵画事情も絡めて語ってもらった。

**GV** 豊平さんには以前からお話を、伺いたかったんですが、なかなかチャンスがありませんでした。今日はいろんなお話を聞かせて下さい。最近はやまとで展示会を頻繁になさってご活躍ですが、そこら辺は何か意図的なものがあるんでしょうか？ぜひ沖縄でもどんどん発表して頂きたいと思うんですけど。

**豊平** 別に意図はないんです。たまたま続いってしまっただけの話で、ぼくとしては沖縄でも発表していきたいんですが、いろいろあって……。まあひとつネックになっているのが、ぼくの作品は重量があって比較的大きいのが多いものですから、沖縄には展示する場所がないんですね。

**GV** 沖縄ではどうしてもサロンのなギャラリーが主流ですからね。県民ギャラリーなどにしても釘一本使えません。現代作家にとっては制約が多すぎますね。そういう点に関して、画廊を運営しているひとりとして、どうにかしなくてはと考えてはいるのですが…。豊平さんの作品についてですが、米軍の廢材を使ったのが多いですね。それは理由というか背景みたいなものがあるんでしょうか？

**豊平** ぼくは79年、ニューヨークに1年ちょっと滞在しました。表現に息詰まりを感じて、それを打開したい気持ちが強くて行ったんです。しかし画廊回りもしたなかでニューヨークの美術に、ひとつの停滞感があったんです。つまりなら刺激されるのがなかったんですね。ところがマンハッタンの壁には、ものすごく触発されて壁だけを写真に撮り続けました。壁にみられる偶然の結晶が、人的作

業よりはるかにリアリティを持っていたんですね。そのリアリティというものを自分なりに獲得したいと思いました。しかし、それは壁そのものですから沖縄に写真で持ち帰っても、それが作品になるわけじゃないんですよ。それをひとつのエッセンスとして、自分のなかでどういう風に表現しようかと思った時に、米軍の掘下の廢材に出会ったわけです。それが今日の作業のベースになっていると



豊平 ヨシオ氏

思っています。

**GV** 沖縄の歴史的状況が廢材のひとつだけに見えてくるというわけですね。まあ、そこまで深読みはしたくないですけど…。

**豊平** 米軍の廢材というものの強さだとかリアリティというものを、よく考えてみるとそこにはギリギリの選択、ギリギリのデザインというものがあると思います。それは死を境にしてのデザイン、そういう部分がより強烈なリアリティをもっているんじゃないかと思うわけです。けど、それが基地をテーマにしていると受け取られるとちょっと困るんです。

**GV** それは、マンハッタンで感じたことと沖縄の米軍の廢材を見て感じたこと

と、かなり共通するものがあるわけですか？

**豊平** 多分にあります。沖縄を発見していくという、ボク自身のテーマはこれからだとも思います。

**GV** 復帰後、美術館のオープンや琉石美術大賞など企業の美術参加で、だいぶ美術界の状況的な変化が出てきました。作家の立場としては、どのように変わってきているんでしょうか？

**豊平** ニューヨークから1972年に帰って来ました。あれから18年、経過しているんですね。ウーン、その間の沖縄の美術状況を考えると、わびしいというか、淋しいというか、そんな感じでしたね。ウチナーの絵カチャー達は、絵カチャーであることよりも、絵カチャーを肩書きにしているだけなんです。これが沖縄の美術状況を通俗的にしてしまっている要因だだと思います。沖縄の文化界を支配しているのは、単純に“肩書きゴッコ”なんです。ですから別に美術界特有なものでもないのですが、美術のほうに顕著にみられた現象だということじゃないでしょうか。そういう意味においては表現というものが、沖縄の絵描きにとってはさほど切実な問題じゃない感じが受けとられる部分がありましたね。作品としては年々良くなってきてはいると思いますよ。

**GV** 作家的な意識が希薄だということでしょうか？

**豊平** そうですね。ぼくの同世代までの人達が一番強く感じたのは、それでしたね。若い時にスタイルを早々とつくって、その後スタイルを変えないという恐ろしい事を平気で出来るという事が、ぼくには信じられない事でしたね。そこら辺がひとつには、沖縄をとりまく状況のなかで大きな課題になっているんじゃないかとも言えるでしょう。で、先程も言いました、沖縄の本土復帰後、肩書きゴッコに終始していたということとがダブるんですね。もっとも最近では、“沈黙ゴッコ”に変わっているみたいですけど、それ

バームヒルスゴルフリゾート

ヒューマンテクノロジー  
髙倉コーポレーション

代表取締役会長 高倉 文子  
代表取締役社長 高倉 幸一

〒900 沖縄県那覇市久茂地3-29-56 Tel0988-61-7621

あじだろ、これからも。



琉球石油株式会社

沖縄県那覇市松山2丁目27番1号 ☎(0988)68-2131



はいいい事じゃないかと思えます。ほくも“沈黙ゴッコ”は好きだから、それには便乗してますけどね。ともあれ、これからの沖縄の美術の発展は、若いアーティスト達に期待しましょうよ。

**GV** そうですね。まあ社会生活を保証するための地位みたいなものがありますからね。教員とか会社員などをやるように作家活動をしてしまうわけですね。特に復帰後、ヤマト化というシステムに便乗した部分もあると思います。しかし最近、作家意識も内側からジワジワと芽生えてきたという気もします。

**豊平** このごろ、上原さん(=GV)はニューヨークとかパリとかによく行かれてるようですね。向こうの美術の制度的なものには、どのような感触を持ちましたか？

**GV** 画廊と画家、社会、コレクター、美術評論が完璧にスクラムを組んでいて、しっかりした美術状況が成り立っているというのをまのあたりにしましたね。日本のように公募展を中心とした作家活動というのはほとんど見られないです。だから日本のような芸術家は、いないと思うんですね。日本にはお花やお茶みたいに家元制度があって、偉い先生についていれば道が開けるみたいなのがどっかにあるんじゃないかと思うんです。ですから芸術家としての種をはやしていく出発点が、違うんじゃないでしょうか。

**豊平** 同感です。欧米に比較して現代美術への限界性が、そこにひとつありますね。

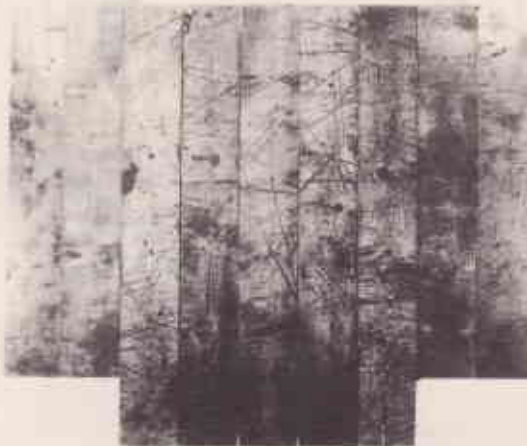
**GV** まあ最近では沖縄の作家たちも直接外国へ出かけて発表の場を求めて、また自己を積極的に売込みに行くということもあるんですけど、そのへんのことについてはどうお考えですか？

**豊平** ニューヨークやパリで発表を試みるのも、それはけしてマイナスではないと思います。しかしそれで国際的な作家になるというのは幻想だと思う。大事なことは、沖縄で何が出来るかということを考える事の方が広い意味での国際性に通じるのではないのでしょうか。

**GV** 豊平さんの作品を見せてもらいましたが、なんかこう非常に隠蔽された世界というか、鬱積した世界のなかでの表現、生活力というか、武骨な力強さとロベタな繊細さ、パイタリティーみたいなものを画面に感じるんですね。そこんと

こは沖縄の人じゃないとできないというようなことを思うわけです。ウチナーンチュを誉めすぎかも知れませんが、これは日本の美術界にもおそらくそういう仕事をする作家がいなかったように思えるんですが…。

**豊平** 確かにほく自身はウチナーンチュを意識して制作しているわけじゃないけれども、自分の作品を見る或いはつくるという過程の中で、やっぱり自分がウチナーンチュだということがわかります。だからほくの作品には、日本人のアーティストに見られる繊細な部分が全く欠落しているんです。まあ悪い意味でもいい意味でも、とにかくチャンブルーみたいな感じが自分の作品にはあると思います。それにハーダーリー。これからのことについて言えば、手がかりみたいなものを



豊平 2007 21.5 in PINK  
及びカラー・フック・コース

さぐりながら、やっていくというのが本音ですね。最終的には、もっと沖縄というものに正面から関わりたいという気持ちがありますけども…。今は、その過程だとみてほしいですね。

**GV** 作家側から我々、画廊に対する要望、期待みたいなものがあれば、お聞かせください。

**豊平** 最近では行政サイドの美術の制度的なもの、県立芸大ができたり、美術館ができたりで徐々に整備されてきました。これからも、もっと整備されるでしょうが、やっぱりほくは民間の活動が活発にならないと本当のクリエイティブなものは生まれてこないと思うわけです。ですから美術状況というのは作品が良ければいいというものではなくて、いろんな分野が相互にクロス、交通していかないと沖縄

の美術の発展も期待できないわけです。ほくは、これまで殆どそういうことを期待していなかったのですが、やはり期待せざるを得ないという気持ちがあります。そういう点からすると、やっぱり画廊サイド、或いは民間サイドが活性化すること、非常に重要な事だと思うわけです。ほくはこの頃美術家との交流も途絶えているし、殆ど画廊回りもしないので(その方が精神衛生には、いいんです)よく分からないところがあるのですが、画廊という現場から沖縄の美術状況というもの、どういうふうに見えるのか。そこらへんをどう考えているか、上原さんにお聞きしたい。

**GV** 先程も外国の例で触れたと思いますが、沖縄の美術状況というのは徐々に良くなってきているとはいえ、まだまだ画廊と画家、社会、コレクター、美術評論というアートを取り巻くそれぞれのサイドが、がちりスクラムを組んだものではないということです。これからは、そういう広い意味の活性化を考えないといけないと思います。絵が売れるという状況になってきたんですから、作家達の画廊との積極的な関わりも期待していきたくて、若いアーティスト達に関して言うと、公募展、個展などを通して思うことですが、タブローとか立体とかにこだわらないで、創作全般に関わりながらもっとスケール感を出してほしいと思います。これから本当に芸術家として仕事をやるんだということを、しっかり受けとめてほしいですね。そういうことで若い人達がやっていくと、沖縄の美術の未来はもっと開けていくと思います。画廊側も作家側をいろいろアシストしながら、社会的なマネージメント、或いは企画、プロデュースを企業などにも働きかけていきたいと思っています。またマスコミなどにも繋がりを持ちながら、美術評論にも関わって沖縄の美術状況をつくっていければと考えています。

**豊平** これからは、作り手以上に画廊の役割とか、プロデュースするというふうなことが、クリエイティブなことだとみなされる時代が沖縄にもくると思います。すでにそのような潮流になっていると思いますよ。時代は。

**GV** 今日は豊平ヨシオさんにいろいろ語ってもらいました。本当にどうもありがとうございました。



**Kentucky Fried Chicken**

株式会社リウエン商事  
代表取締役社長 宮城 義明

〒901-21 沖縄県浦添市宇勢理客556番地 TEL (0988)75-2168

国家試験合格者輩出-No.1の総合コンピュータ専門学校

高等学校

**CSCコンピューター学院**

那覇校 奄900 沖縄県那覇市山下町103-1 電話(0988)59-0746  
中堅校 奄904 沖縄県沖縄市宇空川111-1-10 電話(09893)8-1631

出来上がった空間の壁面に絵が掛けられている場面まで想像すると、より充実したイメージになる。

職業柄、距離をおいて見る機会が多い。距離をおくとはどういうことなのかというと、空間の壁面に漠然と絵の大きさや色、マチエール、額縁の素材、具象、抽象と割りきっていく。場所の目的によってセットしていくのである。なんと軽やかな処理方法かと反省もするが、今のところ仕方がない。出来あがった空間にどのような絵が掛けられようと思ったことかと思えば頭もかくなるが、描いたイメージと異なった絵が掛けられていたりすると（自分のイメージもたいしたことではないが）、これはもうヒヤ汗もんになったりする。

たまには、鶴と亀が松の木や岩がけか

建築士  
親泊 仲真

## 空間を彩るもの

リレーエッセイ

ら明るい表情をみせていたりすると、もはや後ずりを余儀なくされる（勿論その反対もあってマイッタ脱帽もある）。

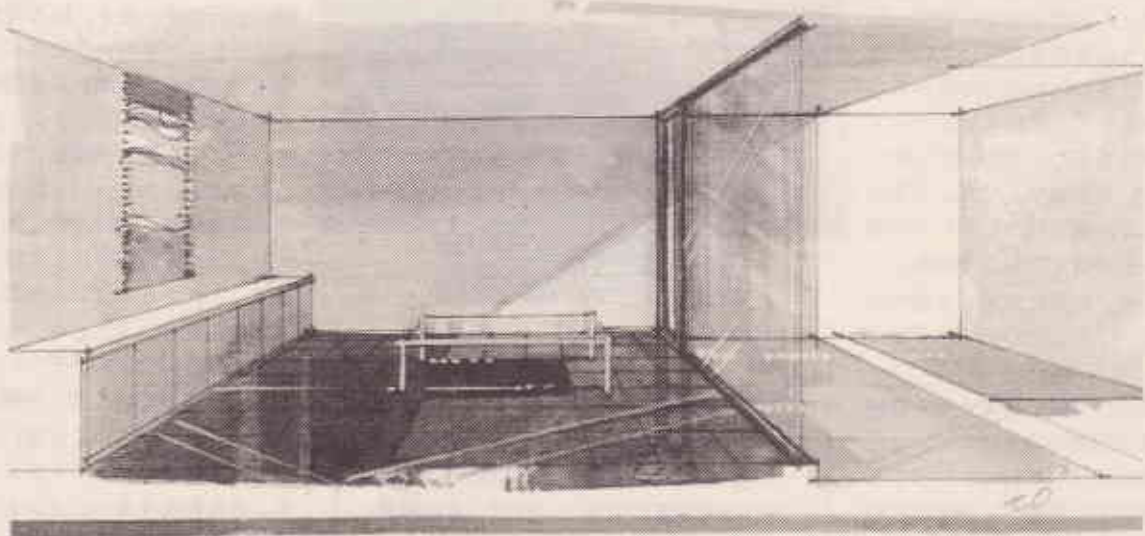
そういったことがあるもんだから、おしなべてオセッカイもしたくなり、力あまっては勝手に絵を買ってきて壁面に掛けて代金を請求したりする。

いずれにしてもそのような構造であるがゆえに、絵画とまともに向きあう位置から少しばかりずれている。胸にゆとりをもちたいと考える。

色彩とマチエール、額縁が空間にハーモニーしているか式の習性に要注意である。

そうこうするうちに、あまりにもショックをうける羽目になってしまった（それは直接絵を見たわけではないが）。

画面いっぱいドスンと広がった黒に



近いセピア色のバッグといおうか…に、カドミウムバーミリオン (6R-510/13) のような赤が横長の四角で下部に横たわっている。セピアと赤の境界が静かに滲みあって、ゆずりあわない。ゆずりあわない分だけ動きがとまっているが、その緊張感とスケールの大きさにしばらく惘然としていると、黒に近いセピア色の上部の画面にさらに黒に近いセピア色が浮かびあがってきているのではないか、これはもうすっかりど肝をぬかれてしまい目の

映像がキャンパスのように四角になってしまった。なぜか赤とセピアの強いコントラストもさることながら、見えにくい同色素のせめぎあいに静かな胸さわぎをおぼえた。

カタチを消していきながら色と色がきついついところで滲みあっている。カタチに寄りかからない色は、色としてのみ成立させようとしているかにもみえる。平面を平面として確認しながらカタチから色を開放しようとしているのか、いずれに

しても平面をこえて奥行やひろがり無限に近づける。

ロシア生まれのマーク・ロスコの本をみたのは7年程前であるが、今でもくつきり憶えている。1960年代の作品であるが、それ以前の水彩、ペン画も自由な手の運動を感じさせながら激しく流れるようなリズム感に満ちている。

いつの日かマーク・ロスコの絵と向きあいたいと願っている。

(おやどまり ちゅうしん)



日本セメント沖縄地区総代理店

株式会社 金城キク商会

本社 那覇市西1丁目1番28号電話(0988)66-1101(代表)  
中部支店 沖縄市宇松本1102番地電話(09893)7-0404(代表)

“専門画材の店”



CULTURE PLAZA

株式会社 みつや書店

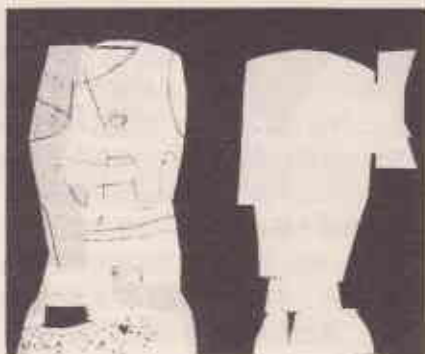
〒902 沖縄県那覇市壺屋1-1-3 ☎(0988)63-1650代



# 画廊沖繩情報



9-1



9-2



9-3



9-4



9-5



9-6



9-7



9-8



9-9

コード No.	作家名	技法	タイトル	サイズ(cm)	価格
9-1	伊江 隆人	墨	日なたぼっこ	65x62	¥ 150,000
9-2	マックス・パバル	リトグラフ	カップル	56x46	¥ 300,000
9-3	アレンバック	リトグラフ	花	58x47	¥ 130,000
9-4	アイズピリ	リトグラフ	オレンジバックの花	58x47	¥ 300,000
9-5	カシニヨール	リトグラフ	ティーカップ	65x48	¥ 750,000
9-6	ベラン	シルク	ムーランルージュ	58x46	¥ 130,000
9-7	番留京子	アクリル	沖縄賛歌	102x71	¥ 170,000
9-8	和宇慶朝健	シルク	波照間シリーズ	88x65	¥ 125,000
9-9	レオネン	木版	ステック	30x43	¥ 75,000

ダイキン冷暖房機特約販売店/那覇市給水・排水設備工事指定店



**南西空調設備株式会社**

〒900 那覇市泉崎2-2-3 ☎(0988)34-7831(代) FAX(0988)34-5348

國場組グループ

**國 和 會**

会長 國場 幸昇

## 自由の限界

アメリカ合衆国にはNational Endowment for the Arts(略NEA)とNational Endowment for the Humanities(略NEH)という行政機関があり、美術館の設立や企画展など、人文科学の分野において援助金が交付されるシステムがあるそうです。プリミティブから前衛アートまで芸術と名の付くものを国が支援しようというこの寛大さ。こういうところに自由の国アメリカを感じさせます。ところが、最近このNEAをめぐる論争が起こっているようで、一部の芸術家にとってはかなりの危機感をもたらすほど大きな問題となっています。アメリカの美術情報誌・Art in Americaからこの話題を取り上げてみました。「猥褻な芸術には、NEAは援助すべきではない！」ジェシー・エルムズ上院議員は、NEAのサポートのもとに展示会を行ってきたかの有名な写真家、ロバート・メイプルソープとアンドレス・サラノの2人を取り上げ、「メイプルソープの作品はホモセクシャルのエロチカであり、サラノの作品は神聖を汚すいかがわしいもので、NEAがこれらを支援すべきではない。」と、予算の大幅な削減や作品を一つ一つ検閲することなどをNEAに対する改正案として議会に提出

しました。芸術家たちの懸命な反発の結果、改正案を極力小さく留めることはできたのですが、改めて検閲が浮上してきたのです。問題は何を基準に“わいせつ”を判断するかということで、議会では1973年に、カルフォルニア州最高裁で定義された“わいせつ”についてつぎのような条件を採用しています。①現代社会の基準に即する平均的人物がその作品の中に性的触発を認める場合、②法令によって性行為の域に入る表現又は描写が認められる場合、③作品全体として文学性、芸術性、政治的又は科学的価値に欠ける場



ロバート・メイプルソープ「KEN MOODY 1985」

合、これらの3つがあてはまる時に作品はわいせつになるのだそうです。定義の不明瞭さを補うためにサドマゾヒズム、ホモエロティキズム、子供の性的利用、性

行為に従事する人々の描写などを例として挙げています。これでは、キースヘリングも池田満寿夫もクビになってしまいそうです。結局、わいせつか否かと判断を司る連中は、法律のエキスパートでもなく、これらの定義(らしきもの)によって極めてプライベートに「これが、わいせつというものだろう」ぐらいで適当に決めていけるわけです。ここに不公平が生じます。道徳的観点からこのところ自由性に対して神経質になっている保守派と、あくまでも表現の自由を主張する芸術家側との間に対立を生んだこの論議は、これまで何に対しても慣用でありすぎたアメリカにとって宿命的な出来事かも知れません。同姓愛やエイズが深刻な社会問題となっているこの国では、それらを触発するような要素をできるだけ避けたいという意識が働いているのでしようが、「臭い物に蓋」ぐらいの意味しかないように思えます。とにかく、NEAに関しては、明確な判定の基準を早急に設定することが望まれます。テクノロジーのめまぐるしい進歩に支えられて、全てにおける自由が可能になってきたかのように見える今日。男と女の境界線もベルリンの壁のごとく崩壊しそうな社会現象。何が自由で、どこまでが許されるのか。アメリカが頭を抱えているこの課題は、いずれ津波のように日本を襲ってきそうな気がします。(玉那覇 弘子)

## ギャラリーウーマン

### 企業の美術コレクション

「21世紀企業の美術戦略」(室伏哲郎著)という本が今話題を呼んでいます。コーポレートアート(企業による美術活動)の先進国アメリカの代表的な企業、AT&TやIBM等の9社を取り上げ、その美術部門がいかに企業の重要ファクターであるかということと美術コレクションの理念や実際的方法がわかりやすく書かれています。収集品の展示、貸出し、各種文化・美術活動、又、本社ビルから工場までの美術設計等、コーポレートアートの統括的なマネージメント内容が紹介されているのです。日頃、私達が感じてはいるけれども、まだ遠い理想のような事を、アメリカではごくあたりまえの企業戦略としてしっかり根付いていることに驚かされます。本社から子会社までの全ての部屋には美術品が展示され、毎日相当な時間をその空間で過ごす従業員は、作品が与える精神的インパクト、あるいは頭脳や感覚への“刺激”という名の洗礼を知らず知らずの内に受けているのです。企業の単なる働き蜂ではなく、人々がより人間らしく生きる為に、そしてより高いレ

ベルの生活環境をエンジョイすることによって、大変クオリティーの高い企業マンパワーを発揮させ、それが顧客とのコミュニケーションを発展させるという企業哲学が、コーポレートアートを実践している企業に共通して見られます。美術品の重要な働きは、ここらへんにあるのです。先日、N企業にお勤めのAさんが結婚の結納返しにと絵画を購入されました。私共にとっては嬉しいことですが、大変奇抜なことをなさると思って、理由を聞いてみたら、Aさんの勤める企業の上役の方が芸術に関心がありで重役室などに絵が飾られているとの事。出入りする機会は少なくとも、環境の与える影響は確かに存在します。苦しい時期であろうと、自慢の本社ビルを売却しようとも、コーポレートアートコレクションを保有し続けているアメリカの企業には全く脱帽です。これから先、沖縄においても企業の美術・文化活動や社会的還元

など細かく記載されていますので、この本を参考にしていただけるとをお薦め致します。(瀬底 貴子)

## 編集デスク

今年の夏は特別アツかった。しかし美術界は、そんな暑さを吹きとばす話題が多かった。沖水の甲子園の準優勝といい、新しい時代の到来を感じさせる。浦添市美術館の印象派展、琉石の公募展、ロダン大賞展での喜名盛勝氏の入賞、那覇市民ギャラリーの名渡山愛順展と、何十年ぶりのカンカン照りも忘れさせるほどであった。日頃、なかなかしゃべってくれない豊平ヨシオ氏にもGVインタビューを試みた。今日性を常に意識した表現が現代美術の旗手になり得ることも語ってもらった。閉塞状況に陥ってしまった沖縄の現代美術も、次代の若い作家達に打破してもらおう以外に期待する順はないのか。(上)

地元のビールが断然うまい。

最も新鮮

オリオンビール